

一人ひとりの行動が、社会全体を変える



升田 猛
経済学部講師
ますだ たけし

企業が利益を追求するのは当然の使命。しかし、モノを生産する過程では限りある資源の破壊や温暖化などマイナスの影響は免れ得ない。経済活動におけるもつけを一定に据えたまま、環境破壊のような社会的な損失を回避し、社会がよくなるような経済制度を作れないか。それが升田先生の研究テーマだ。「多くの学生にとって経済とは、お金に関するイメージが強い。しかし経済学とは私たちの身の回りのことを考える基礎にもなる学問なのです」と解説する。

授業では「ゲーム理論」という手法を用いる。ゲーム理論とは、自分と他人の行動が互いに影響を及ぼし合う経済状況のこと。それぞれが取る行動が結果的にどのような状況を生み出すかを予測するものだ。「一人ひとりが利益を追求し、自分勝手な行動を取れば、社会全体が悪くなるのは明らか。この手法を学びながら、自らの行動をどうすべきか意識して欲しい。」「自己中心時代」とも言われる現代、学生に最も伝えたいことは、自身の研究主題の「命題」そのものである。

出席点を考慮せず、試験のみで評価を下す。さらに3回欠席した時点で除名にするなど、手厳しい。これは何かを学ぼうとするなら、出席は当然の義務」という考えからだ。サーフィン好きで白いTシャツの似合う升田先生。学生との距離が近い分、自らの学問と信念に妥協することはしない。

「身体を開く」ことがコミュニケーションの基本！



宇佐美 隆憲
社会学部教授
うさみ たかのり

現在、長年行ってきたモンゴル相撲に引き続き、ミヤンマー伝統の蹴鞠(けまり)、チンロンの研究をしているという宇佐美教授。そのユニークな研究対象にまず目がいくが、このような民族独特のスポーツを通じて、文化を研究する「スポーツ人類学」が専門だ。

スポーツが持つ社会的な意味、文化的な要素を理解するために自らトライするのが宇佐美流。「自分とは文化的に違う人たちからルールや技術を教えてもらつと、地域・民族によつて感覚や伝え方が異なることが実感できる。それを超えて理解しようとする姿勢が、世界平和と結びつく」と語る。青臭いと思われるかもしれないが、と前置きしながら「世界中の人々が仲良くなれることを、身体を張つて、学生に伝えていきたいと微笑む。

身体行為がテーマの授業では、自分を見直す機会になればいいと話す。「身体が無意識にやっていることを改めて考えてみると、自分自身が見えてきます。」「コミュニケーションにおいて重要な、身体を開く、心を開く、ことができない学生が増えている。相手の話を聞く努力をすること。今の学生は我慢が苦手。話を最後まで聞いてあげられる人が少ない。」「ゼミ中静かな学生たちに、さらにこう続けた。「自分の考えを伝える努力をしなければ。伝えるべきときは伝えることが大切です。」「ちなみに宇佐美教授、チンロンの修行で約20キロ痩せたとのこと。熱心な研究での思わぬ収穫と言えそうだ。

考え方は一つではない



本名 靖
ライフデザイン学部助教授
ほんま やすし

今日、一般的になつた介護という言葉。口にものを運び食べさせてあげたり、体を拭いてあげたりという補助のイメージがあるが、「介護福祉」は、単なる介助にとどまらない。例えば食事ひとつでも、味の好み、どこで誰と食べるかなど、いろいろな思いがある。それを「食事という生活」と捉え、援助するだけでなくその生活を豊かにしていく。それが「介護福祉」の考え方だ。高齢社会を迎え、援助が自分たちの問題となつた今、そのあり方も大きく変わりつつある。

身体障害者の施設などで10年以上働き、その後研究者になつたという本名助教授は、「障害を持った人や一般の人、どちらにも通用する援助のあり方。それを目指す福祉、そして社会でなければ」と語る。

ポリシーは、共に考える「経験を積ませること。授業では、できるだけ多くの学生に発言させ、それについての意見を次々に指名する。この「揺さぶり」に、決められた答えに慣れている学生は戸惑っているはず、と本名助教授は「やりと笑つ、現場は知識だけでは通用しない。理論を理解した上で、多様な考えの中から何を選ぶのか。自ら考え選択できる力をつけたらいい。少しずつだが、学生が変わっていく手応えを感じている。

福祉の現場にたつたとき、自ら現場を変えられる人。行き詰まつたとき糸口となるヒントを自ら探し、周りに示すことができる人。そんな学生を育てるのが目標だ。